

パートナーシップに関するホワイトペーパー



つながる、未来の貨物輸送：

AI、最適化、  
ネットワーク化された  
物流の力



# 目次

- 3 はじめに
- 4 調査の概要
- 5 入荷物流管理
- 7 貨物輸送の調達の実践と機会
- 9 輸送と移動の課題
- 12 テクノロジーの導入と将来への準備
- 14 可視化とデータ管理
- 15 Cognitive Solutions による貨物輸送の未来



# はじめに

輸配送管理を取り巻く環境は、テクノロジーの進化とサプライチェーンの複雑化に伴い、急激に進化しています。

FreightWaves 社はサプライチェーンのデジタル変革でリーダーシップをとる Blue Yonder と提携し、データ管理と可視化、ソフトウェアの問題点と制約、非効率な入荷物流について、荷送人、輸送業者、その他の物流仲介者への調査を行いました。

この調査は現在の輸配送管理エコシステムの全貌をとらえることを目的としています。

そこでは現在、AI を利用したネットワークの最適化と可視化の導入によって、大規模な変化が起こっています。Blue Yonder はこうした変化の最前線に立っていますが、その最たるものが 実行業務向け Cognitive Solutions : Transportation Management (輸配送管理) です。このホワイトペーパーでは、業界の利害関係者の回答から得た知見と、Cognitive Solutions によって計画のスピードと精密さを強化しながら在庫回転率を上げる方法について掘り下げていきます。

## 調査の概要

この調査の参加者はサプライチェーンのさまざまな分野の専門家たちであり、その中でも多くを占めるのが、製造業者と小売業者の両方（31.34%）から成る、自社資産を所有する輸送業者（35.82%）と荷送人です。こうした分布から、貨物輸送と物流のオペレーションに最も直接的に関与している人々の視点が調査結果にしっかり反映されていることがわかります。

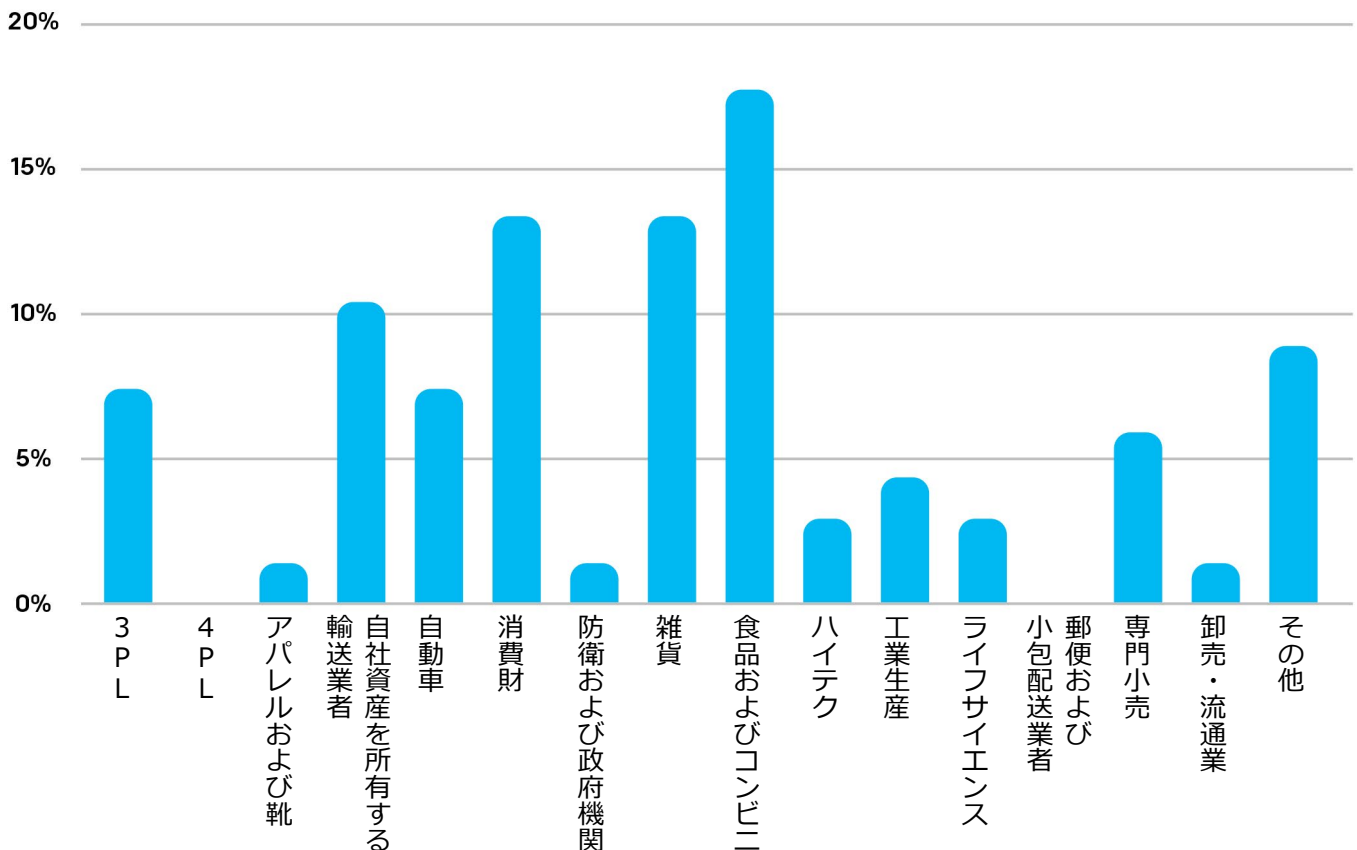
輸送業者はオペレーション上の課題の影響を直接感じていることが多いので、自社資産を所有する輸送業者がこの議論に積極的に参加するのも当然のことでしょう。

物流分野の変化に関する輸送業者や荷送人からの意見は特に有意義なものとなっています。そのため、この調査の分析結果には、貨物を直接製造および輸送している専門家たちの視点が大きく反映されています。

サードパーティロジスティクスプロバイダー（3PL）は回答者の12%をわずかに下回っていますが、貨物輸送仲介者はおおよそ9%を占めています。興味深いのは、自社を4PLだと認識している回答者がわずか1.49%であることで、このモデルが比較的ニッチなままであることを示唆しています。最後に、「その他」の回答者には、農産物加工メーカー、企業オーナー、輸入業者、グローバル物流コンサルタント、配車担当者などが含まれます。

## 貴社は主にどの業界に属していますか？

■ 回答数



内訳を見てみると、多岐にわたる業種の組織がこの調査に参加していることが明らかにわかりますが、特に集中している業種もあります。食品およびコンビニは 17.91%で最多を占めており、このセクターが物流パフォーマンスの一貫性に大きく左右され、特に生鮮品に関してサプライチェーンの混乱の影響を受けやすいことを示しています。消費財と雑貨がいずれも僅差 (13.43%) で追っており、中心となる小売業や動きの速い製品カテゴリが物流活動の大部分を牽引し続けていることがはっきりとわかります。

自動車は 7.46%で、この業界特有の複雑なグローバルサプライチェーンの中で健闘しているようです。

同様に、工業生産、ライフサイエンス、ハイテクは、個々のシェアは小さいものの、サプライチェーンの信頼性が生産の持続性や規制コンプライアンスと直結している業界の観点からの重要な意見を得られることとなりました。

注目すべきは、アパレルおよび靴、卸売・流通業、防衛および政府機関がそれぞれわずか 1.49%で、最も少ないことです。これらのセクターは広範な物流エコシステムで重要な役割を果たしていますが、この調査の主要な回答者ではありませんでした。「その他」のカテゴリはおよそ 9%で、建設、農業 (葉物野菜類)、燃料輸送、航空宇宙製造業、特殊素材 (樹脂、化学製品) などの、もう一つのニッチなセクターです。

## ▶ 入荷物流管理

入荷物流管理を取り巻く現状としては、組織をまたいで断片化されたアプローチが用いられ、企業はリソースや複雑さのニーズに応じた多様な戦略を採用していることが明らかになっています。調査結果では、従来の手動による連携 (45.31%) と非常に高度なネットワーク化された TMS プラットフォーム (45.31%) がほぼ同じ割合であり、業界が移行段階にあることを示しています。回答者のほぼ 3 分の 1 がスタンドアロンの TMS ソリューションを活用しているか、サードパーティの物流業者に頼っています (どちらも 29.69%)。

実際 12.5%が、入荷物流が十分に可視化されていないことを認めています。透明性の欠如は、コストの上昇、非効率性、サービスの混乱につながります。入荷物流管理は極度に断片化されたままであり、組織では従来の手動によるプロセスと、ネットワークを活用したより高度なテクノロジーのバランスを取っています。

組織はさまざまなモデルを実験しているところで、1 つのベストプラクティスまでは至っていません。アプローチがこのように多様化しているのは、企業間で成熟度や投資能力にばらつきがあるからです。いまだにスプレッドシート、電子メール、電話に頼っている企業がある一方で、テクノロジーを活用したソリューションやサプライチェーンパートナー全体のリアルタイムの可視化を活用している企業もあります。

調査の回答により、入荷物流を適切に管理するうえで組織が直面する重大な課題がいくつか明らかになりました。最大の課題は手動プロセスであり、回答者は、手作業が多すぎる、手動による計画の要件が広範にわたる、プロセスの各ステップの連携に非常に多くの手作業が必要になる、といった問題を指摘しています。データ管理と可視化の問題は、これとは別の大きな課題となっています。企業は TMS への手動でのデータ入力、ERP と TMS 間の EDI 接続の欠如、出荷・製造業務における非効率なリアルタイムの可視化、といった問題と格闘しています。

## 貴社の現在の入荷物流における最大のギャップと非効率性はどこで生じていると考えられますか？

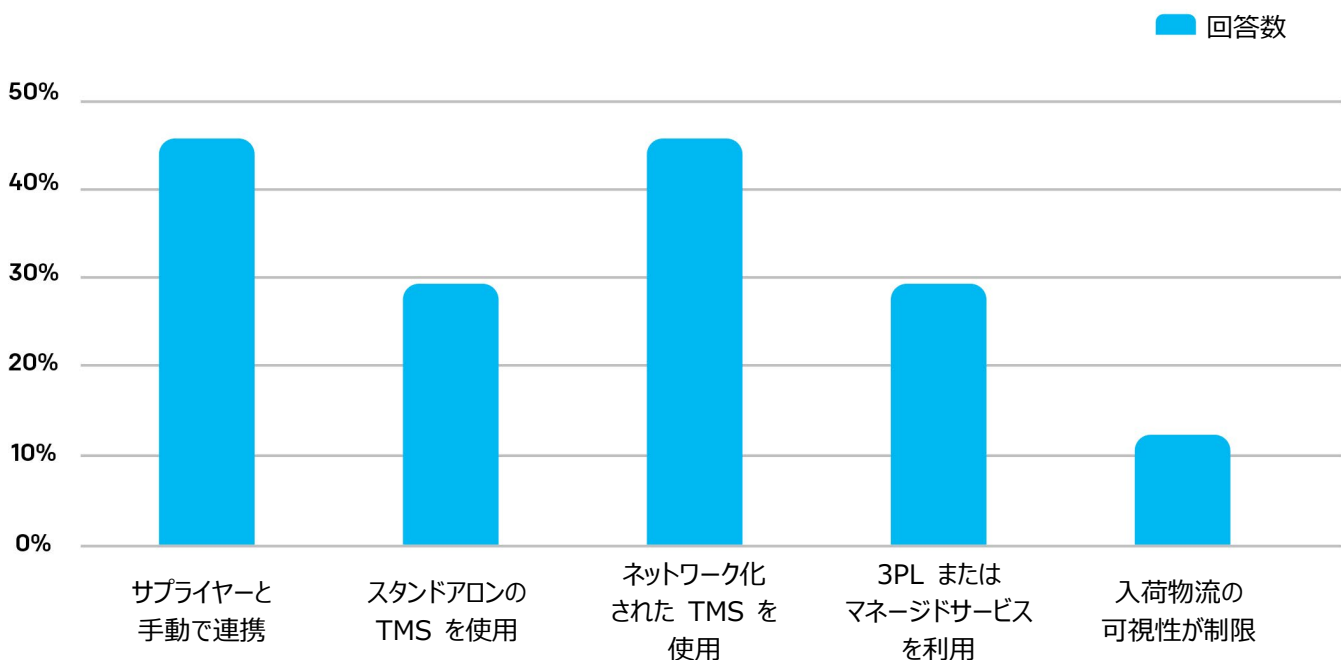
- ◆プロセスの手作業が多すぎて、ルートや料金を最適化できない。
- ◆プロセスのステップごとの連携や管理に非常に多くの手作業が必要になる。
- ◆海上輸送と内陸輸送の連携
- ◆荷送人/荷受人による自動化/情報の共有

外部要因も非常に大きな問題を生んでいます。たとえば、予測の妨げとなる関税などの地政学的な問題、荷受人からの非現実的なサービスへの期待、海上輸送業者と内陸の物流業者との連携といった問題です。特化された要件（コールドチェーンの監視、空きコンテナの管理、鉄道輸送情報の透明性など）も複雑さを増す原因となり、多くの企業が体系的に対処しようと苦慮しています。

調査の回答で挙げられた非効率性は、個々の企業のオペレーションだけではない、基盤となるシステムの問題を指摘するものです。

情報の断片化は重大な非効率性をもたらします。鉄道輸送事業者は出荷情報を非公開のままにして、それらの情報を利用可能かどうか、直前に知らせるため、保管料金や運用コストの増大を招いています。荷送人と荷受人の間の自動化と情報共有の欠如はボトルネックとなり、サプライヤーが経路選択を管理する場合、大抵はコストやサービスの成果が最適化されなくなります。リソースが効率的に使用されていないことは、空荷走行距離、設備管理、ドライバーの離職防止といった、ネットワーク全体の最適化に影響する課題が懸念されていることから明白です。最も重要なのは、データを有効に活用して意思決定や予測ができていないために、根本的な非効率性が生じていることでしょう。組織がデータに基づいた知見ではなく、個人の判断に従って意思決定を行っていることになるからです。

## 貴社が入荷物流は現在どのような方法で管理されていますか？



こうしたあらゆる非効率性が示唆しているのは、テクノロジーソリューションが存在しているにもかかわらず、サプライチェーン

エコシステム全体の入荷物流オペレーションの最適化に必要な統合と標準化を業界がまだ達成できていないことです。

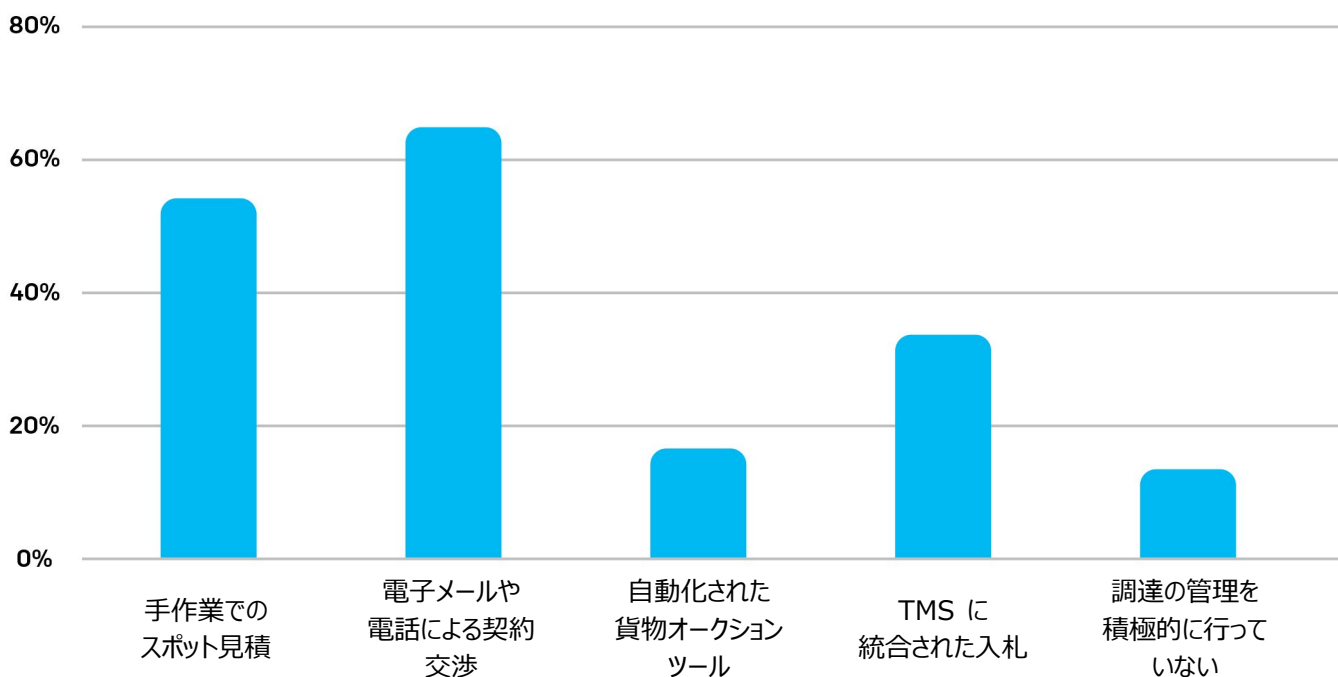
## ● 貨物輸送の調達の実践と機会

今日の貨物輸送の調達状況からは、業界が従来のやり方で業務を進めるべきか、新たなデジタル変革の機会を活かすべきか、板挟みになっていることがわかります。多くの企業では業界でこれまで何十年にもわたって通用してきたやり方（電子メールでの交渉や手動のプロセス）を今も続けていますが、それでは最新のサプライチェーンで複雑さに向き対処し、求められる俊敏性を十分に実現することは難しいことも認識されつつあります。

同時に、連携可能な、ネットワーク全体にわたる調達プラットフォームが、透明性や市場への応答性を強化する可能性のあるソリューションとして注目を集めています。これらのプラットフォームは、輸送業者や荷送人が状況に応じてやり取りすることができ、サプライチェーンネットワーク全体での貨物輸送力の確保および管理方法を変革する可能性もある、共有の環境を必ず生み出します。しかし、業界でのこうしたイノベーションへの姿勢はまちまちであり、実装の複雑さ、データの共有、既存のシステムとの統合に対する懸念と、もたらさせる可能性のあるメリットを天秤にかけている状況です。

## 貴社は現在どのような方法で貨物輸送の調達を行っていますか？

■ 回答数



新たなデジタルツールが続々と現れていても、貨物輸送の調達では従来の方法が用いられている場合がほとんどです。65.15%という紛れもない大多数の企業が電子メールや電話で契約交渉を行っていると答えており、54.55%の企業では手作業でのスポット見積が中心になっています。こうしたアプローチは長年にわたる業界の慣行を反映したものです。効率の悪さも目につきます。透明性や拡張性、市場の変化への迅速な適応力に欠けることが多いからです。

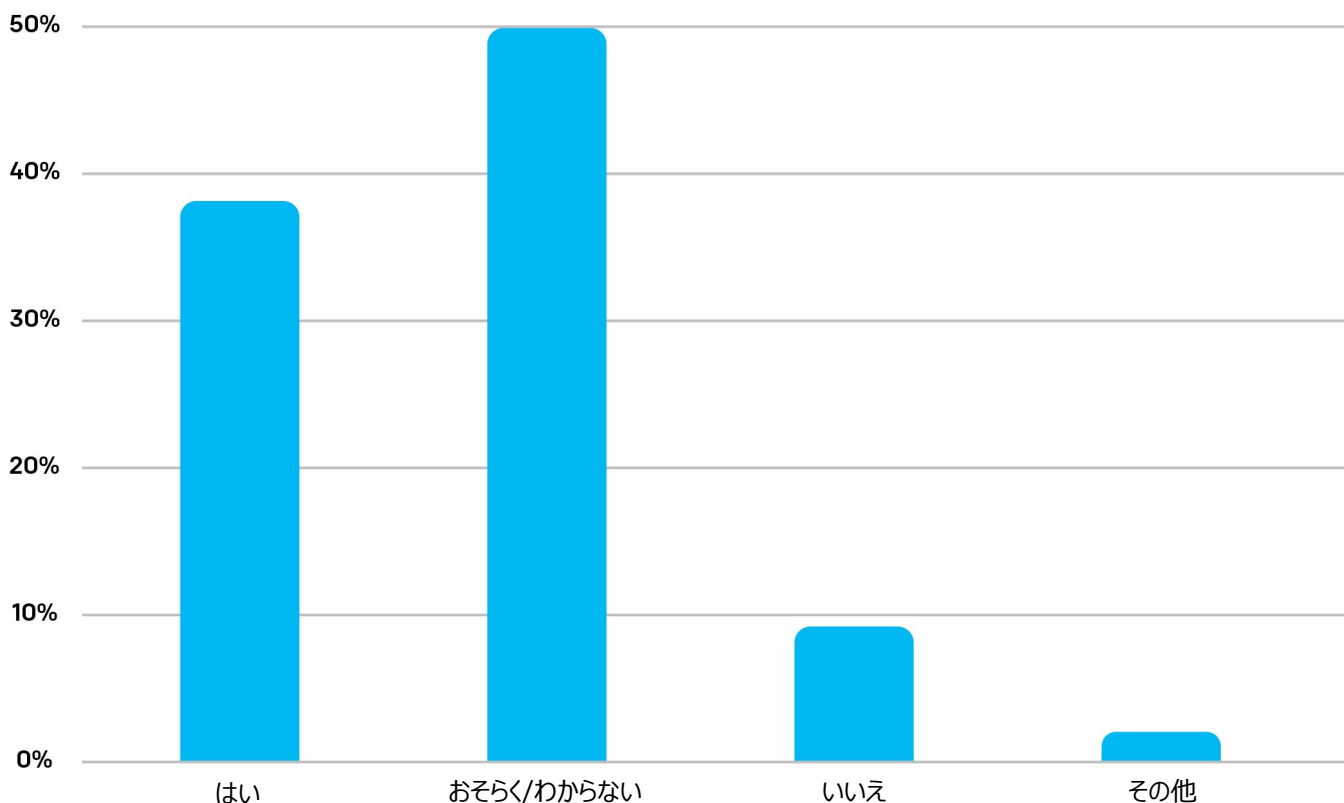
同時に、最新のソリューションも勢いを増しています。回答者の3分の1(33.33%)はTMSに統合された入札を利用しており、テクノロジーを活用した調達が定着しつつあります。自動化された貨物オークションツールは16.67%で、まだあまり一般的ではありませんが、デジタル化や効率化に向けて一歩進んだことを表しており、徐々に導入が増えているものの、まだ広く普及しているわけではないことが示唆されています。

興味深いのは、13.64%が調達の管理を積極的に行っていないと認めていることです。こうした組織では、貨物の取り扱いを3PLなどのパートナーが完全に担っているか、単純に調達が戦略上の優先事項ではなく、コストの削減や効率性の向上は後回しになっている可能性があります。

このデータは、調達環境が過渡期にあることを表しています。従来のやり方はまだ根強く残っているものの、統合型の自動化されたツールの導入が着実に増えていることは、デジタル調達戦略が採用されつつあることを示しています。

## 輸送業者と荷送人が共有のプラットフォーム上でやり取りする、ネットワーク全体にわたる貨物輸送の調達機能にメリットはありますか？

■ 回答数



ネットワーク全体にわたる貨物輸送の調達プラットフォームの有用性については、慎重な楽観論が見られます。回答者の半数（50%）が「おそらく/わからない」と答えており、実用性、考えられるメリット、既存のプロセスとの統合方法について、多くの企業ではまだ評価が定まっていないことを示しています。導入やデータの透明性に不安があり、1つのプラットフォーム上で複数の関係者との複雑な連携を図らなければならないことが心配されるため、半信半疑になっている可能性があります。

その一方で、回答者の37.88%は「はい」と答えており、調査対象の企業がかなりの割合で興味を示していることがはっきりとわかります。こうした企業は、共有のプラットフォームで、特にスポット料金や契約料金をより柔軟に管理することによ

り、効率の向上、コストの削減、市場の可視化が実現される可能性のあることを認識しているものと思われます。

9.09%の少数グループが「いいえ」と答えているのは、現在の調達プロセスで十分だと考えているか、新しいテクノロジーの導入に警戒心を抱いている企業があることを示しています。

ネットワークを活用した調達機能は今後ますます普及していく可能性があります。導入する場合は、具体的な価値を示し、輸送業者と荷送人の信頼関係を構築して、既存のTMSやオペレーションワークフローとシームレスに統合することが必要になります。

## ● 輸送と移動の課題

それぞれ独自のシステム、優先事項、オペレーション上の制約を有する複数の外部パートナー間で連携を図る必要がある場合、輸送の実行には独特の複雑さが伴います。サプライチェーンの相互接続が進み、俊敏性と信頼性に対する顧客の期待が高まり続けるにつれ、こうした課題は厳しさを増しています。企業は複雑化する輸送業者の関係性、サプライヤーの依存関係、物流サービスプロバイダーに上手に対処しなければなりません。

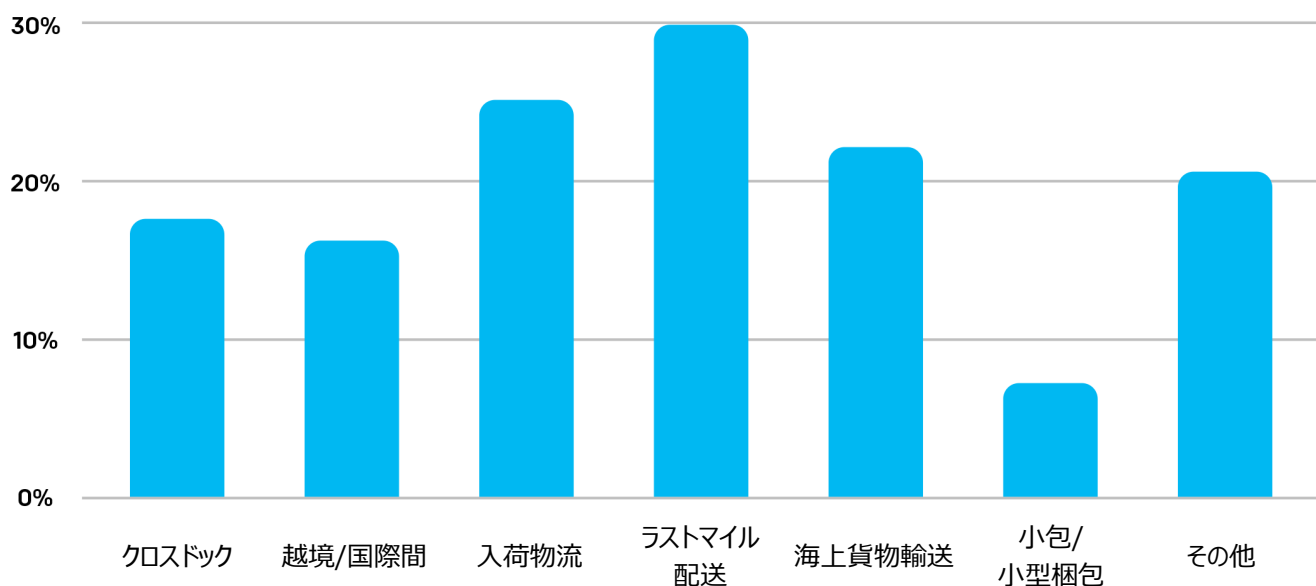
多くの場合、こうした外部との連携は可視性のギャップ、コミュニケーションの断絶、インセンティブの不一致を露呈させ、サービスレベルやコストに大きな影響を及ぼすことになります。

企業は、柔軟なオペレーションを必要とし、予測可能で効率的な輸送の実行を求めており、そのどちらもバランスを取りながら実現する必要があります。それと同時に、優先すべき課題がいくつもあるか、限られたテクノロジー機能しか使用していない可能性のあるパートナーとの円滑な関係を維持し続けなければなりません。

こうした連携の問題がどこに最も深刻に表れているか（どの輸送モードの実行が最大の課題となっているか）を理解することは、現代の要求の厳しい市場でサプライチェーンのパフォーマンスを最適化し、競争力を維持しようとする企業にとって不可欠になっています。

## 外部パートナー（輸送業者やサプライヤーなど）と連携する場合に、 貴社にとって最も困難な輸配送方法はどれですか？

■ 回答数



この質問への回答では、外部パートナーと連携する際に企業がどこに最もプレッシャーを感じているかが明らかになっています。ラストマイル配送が29.85%で、最大の課題として突出しています。これは広範な業界における傾向と合致しています。多くの場合、ラストマイルはサプライチェーンで最も複雑かつコストのかかる、顧客と直に接する区間だからです。2番目に多かった回答が入荷物流で、25.37%でした。サプライヤーのスケジュール、生産タイムライン、利用する輸送手段を同期させるのに、現在多くの企業が苦慮しているからです。

海上貨物輸送は22.39%で、やはり上位を占めています。近年はキャパシティの制約、地政学的な問題、レートの変動によって、この輸送モードを取り巻く環境が不安定になっているからです。クロスドックと越境/国際間の移動もそれぞれ17.91%と16.42%で、かなりの回答数となっています。

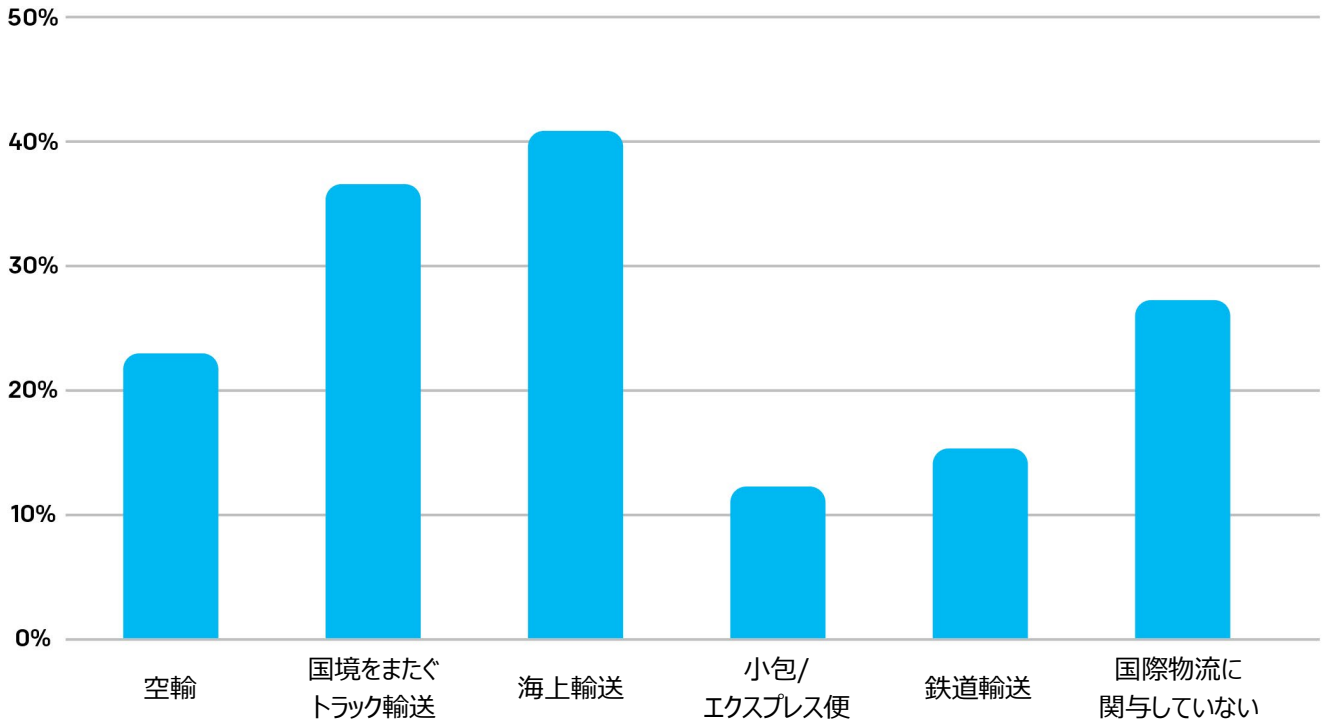
興味深いことに、小包と小型梱包の出荷はわずか7.46%で、困難だと考える割合が最も低くなっていました。これは、e コマースによって小包の量は爆発的に増えているものの、大部分の組織がテクノロジーとプロセスの標準化によってこうした流れに適応していることを示唆しています。「その他」と回答した20.90%は具体的に、「ホットショット輸送」、規模の拡大、集荷、コールドチェーンの完全性、随時配送の積荷、LTL、入荷と出荷の温度管理、小売配送とOTIF コンプライアンス、統合、通行料のかかる高コスト走行、コミュニケーションなどを挙げています。

このデータは全体的に、最終マイルでの輸送の実行と上流の可視性が依然として最も高いハードルとなっていることを示しています。

## 貴社のビジネスにとって最も重要な国際輸送タイプはどれですか？

(該当するものをすべて選択)

■ 回答数



回答者の 40.91%が海上貨物輸送を選択していることから、これが最も重要な国際輸送モードと見なされていると考えられます。この結果には、国際貿易では海上輸送が主流であり、スピードよりもコスト効率が重視されるバルク品や大量輸送の場合は特にそうした傾向があったことが反映されています。地域間貿易の円滑化が重要視されていることから、国境をまたぐトラック輸送が僅差の 36.36%で続いています。北米のような市場の多くのサプライチェーンでは、米国、カナダ、メキシコ間の国境をまたいだ輸送が中心となっています。

高コストにもかかわらず、回答者の 22.73%は空輸を挙げています。ハイテク、自動車、ライフサイエンスなどの業界では、適切なスピードと温度での取り扱いが必要とされるからです。

鉄道輸送は 15.15%で、以前からあまり一般的ではありませんが、特定の長距離輸送や大陸横断輸送には適しています（ユーラシア横断鉄道など）。小包とエクスプレス便は e コマースで広く使用されていますが、これを選んだのは回答者の 12.12%のみでした。ここでの調査対象となっている国際間の B2B 輸送のほとんどではこの輸送モードの重要性がそれほど高くないことがわかります。

注目すべきは、4 分の 1 を超える回答者（27.27%）が国際間の物流にまったく関与していないと答えていることであり、多く企業にとって国際貿易は不可欠であるものの、依然として国内のオペレーションに注力している企業がかなりの割合であることを明確に示しています。全体的に、この調査結果では、ほとんどの回答者が海上輸送と国境をまたぐトラック輸送を国際輸送の主軸と見なしていることが浮き彫りになっています。

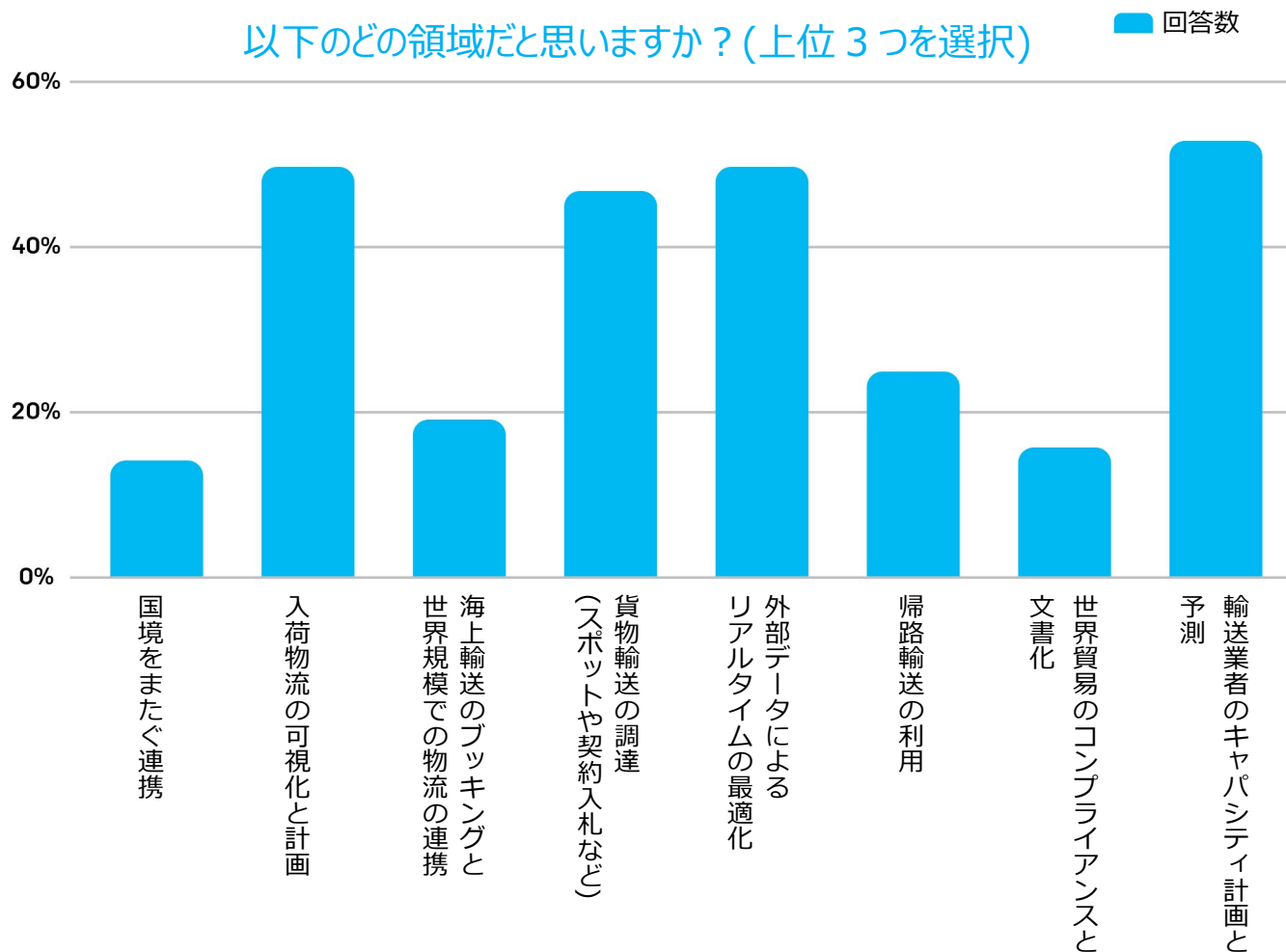
## ▶ テクノロジーの導入と将来への準備

輸送および物流業界は、高度なテクノロジーの導入と統合に向けた重要な転換点にあります。企業は人工知能と高度な TMS プラットフォームの可能性と不確実性を見極めようと苦慮しています。これらのテクノロジーは、市場の混乱を予測できる予測分析から、ルートやキャパシティの割り当てを柔軟に調整できる AI を利用した最適化までのオペレーションを変革する可能性を秘めています。

こうした可能性はかなりのメリットをもたらしますが、多くの企業は実装の日程や実際の適用について慎重な姿勢を崩していません。

現在のテクノロジーが進化した背景には、サプライチェーンが複雑化し、リアルタイムの意思決定と予測機能の必要性がかつてないほど高まっていることがあります。信頼性への懸念、統合における課題、投資利益率の問題が、導入戦略に影響を及ぼし続けています。これらの新しいテクノロジーで自社のオペレーション機能をどのくらい強化できるかを評価するときには、最先端のソリューションの利点と、現実のシステムや要件とのバランスを考える必要があります。

ネットワークを活用した TMS が最大の価値をもたらすのは、以下のどの領域だと思いますか？(上位3つを選択)



この質問に対する回答から、企業がネットワークを活用した輸配送管理システム（TMS）のメリットを得られる可能性が最も高いと考えている領域が明確になりました。輸送業者のキャパシティ計画と予測が最上位（53.03%）で、需要と確保可能な供給量をよりの確に調整するための予測機能に、業界の注目が高まっていることがわかります。市場のキャパシティとレートはどちらも変動が激しいので、適切なリソースを予測して確保する機能は大きなメリットをもたらすと考えられています。

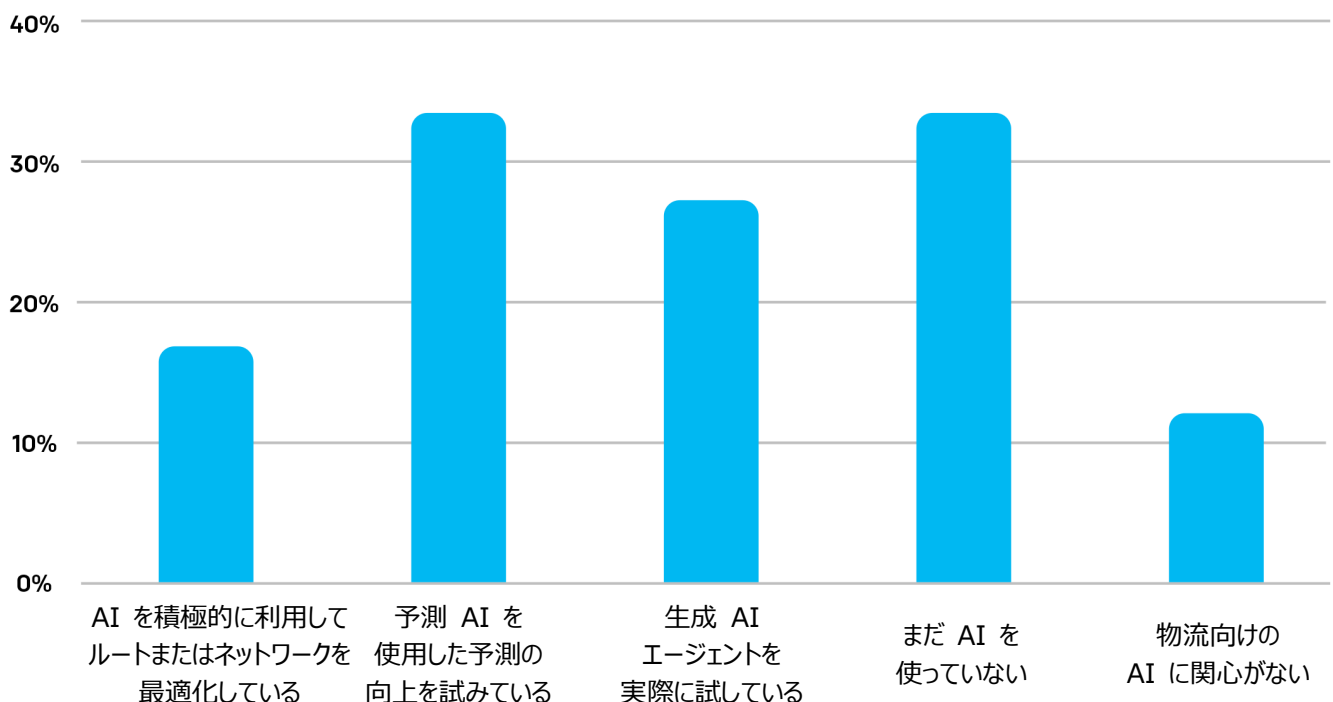
入荷物流の可視化と計画が、外部データを使用したリアルタイムの最適化と並んで 50%です。これは、静的な計画のみに頼らずに、エンドツーエンドの透明性を確保してデータを柔軟に使用することが企業にとって非常に重要になっていることを示しています。外部市場の状況、混乱、または需要の変動を考慮して意思決定を行える TMS は、回復力を高めるために不可欠だと考えられています。

次に続くのが貨物輸送の調達で、46.97%となっています。荷送人、輸送業者、仲介者は、不要な管理作業を行わずに、入札プロセスを合理化し、競争力のある料金を提示できるようにすることを非常に重視しています。海上輸送のブッキングや国境をまたぐ連携はある程度に関心を集めているものの、コンプライアンスと文書化は 16.67%にとどまっており、これらの機能については、必要ではあっても早急に改善を要するわけではなさそうなことがわかります。

全体的にこれらのデータから、予測性と可視性を向上させ、物流をより最適化できる TMS の需要の高さと、コストとサービスレベルに直接影響する 3 つの領域が明らかになりました。

## TMS の AI 機能に物流または輸送管理をどの程度までサポートしてくれることを期待していますか？

■ 回答数



この質問に対する回答は、AI の導入の初期から中期の段階にあるサプライチェーンの状況を示しています。回答者の3分の1 (33.33%) は AI 予測を使用した予測の向上を試みており、機械学習を活用して需要を予測し、在庫を最適化して、オペレーション計画を強化することに強い関心を示しています。別の 27.27%は生成 AI エージェントを実際に試しており、企業が自動化されたコミュニケーション、計画支援、または意思決定サポートなどのタスクに AI を利用したツールを試していることを示唆しています。

AI を積極的に利用してルートまたはネットワークを最適化していると回答したのは 16.67%のみです。完全に機能している AI アプリケーションはまだ比較的まれであり、簡単に統合できないことやクリーンで信頼できるデータが必要であることが理由だと考えられます。

一方で、回答者の 33.33%は AI をまったく使っておらず、まだ多くの企業が AI のことを意識し始め、評価している段階であることを明確に示しています。物流向けの AI に関心がないと答えた企業も 12.12%と少数とはいえあります。これらの企業は、現在のプロセスに満足しているか、テクノロジーの導入、信頼性、コストに関して懸念を感じているものと思われます。

この調査結果は、AI (特に、予測分析や生成 AI ツール) に関心を持ち、実際に試してみようとする企業は増えているものの、業務で幅広く利用する企業はまだ限られていることを示しています。信頼とテクノロジーの成熟度は高まっており、業界は AI をより積極的に利用した意思決定へと徐々に移行していく準備ができているように思われます。

## 貴社のビジネスにとって最も魅力的な AI またはインテリジェントエージェントのユースケースはどれですか？

- ◆ 大型特殊貨物のルート管理
- ◆ 荷組み、予測、報告
- ◆ すべての輸送システムを集約
- ◆ 内部システムやデータと接続し、出荷プロセスの間に例外を管理して解決
- ◆ 高精度で安定して予測できるクライアント

### ▶ 可視化とデータ管理

この調査の極めて重要なテーマは、入荷物流の管理とサプライチェーン全体の完全な可視化の実現に向けた課題です。およそ 50%の回答者は、外部データによるリアルタイムの最適化が非常に重要だと強調しており、このことは、エンドツーエンドの透明性が必要であることを明確に示しています。当然、外部の市況や混乱を意思決定プロセスに柔軟に組み込むことは、回復力や俊敏性を維持するために不可欠です。

Blue Yonder Cognitive Solutions は、予測および生成 AI 機能を活用してこれらの課題に対処します。これらのソリューションは、企業が有害なイベントや需要の変動を予測するだけでなく、問題を解決するための具体的な手順も示せるようにします。こうした高度な分析をオペレーションに統合することで、輸送のリーダーはより多くの情報に基づいてタイムリーな意思決定を行い、効率を高め、リスクを最小限に抑えることができます。

この調査では、依然として従来の方法による貨物輸送の調達が主流とはいえ、テクノロジーを活用したソリューションへの関心が高まっていることも明らかになりました。33%を超える回答者が調達プロセスを合理化するために TMS に統合された入札を導入し、16.67%は自動化された貨物オークションツールを採用しています。

Blue Yonder の輸配送管理は、荷送人と輸送業者向けの統合プラットフォームを提供し、可視性を高め、連携を強化することで、これらのプロセスを促進します。

## ▶ Cognitive Solutions による貨物輸送の未来

### インテリジェントなオペレーションの実現

Blue Yonder の輸配送管理の中核を成すのは、インテリジェントなオペレーションをサポートする機能です。これは、積荷計画、経路選択、スケジューリングを最適化する機械学習アルゴリズムによって実現されます。これらのアルゴリズムは、履歴データを学習し続けることで、人間の介入を最小限に抑えて状況の変化に適応するため、複雑なネットワーク全体で効率的かつシームレスに輸送を実行できるようになります。

### 俊敏性と拡張性

Blue Yonder の輸配送管理は、グローバルに展開して柔軟性をもたすことができるよう設計されています。これは現在の変化の激しい貨物輸送環境において非常に重要なことです。さまざまな利害関係者の固有の要件に対応し、すべての関係者が足並みを揃え、連携してオペレーションを行えるようにします。

激しい変化を繰り返しがちな業界では特に、需要と供給の変動に対処するために適応性は不可欠です。

### 混乱への確かな対応力

ネットワークを活用した TMS の特長的な機能の 1 つは、混乱への対応力です。Blue Yonder のシステムは、市況の突然の変化、規制の変更、予期しないオペレーションの失敗のいずれにも対応できる、リアルタイムの実行可能な知見を提供します。

潜在的なリスクに関する予測警告と、そうしたリスクを軽減するための具体的なアドバイスにより、企業は卓越したサービスを提供し続けられるようになります。

### 輸送業者の管理と連携

企業はこれまで、複数の異なるシステムや、さまざまな輸送業者からの一貫性のないデータへの対応に苦慮してきました。Blue Yonder のネットワークベースの輸配送管理ソリューションに統合することで、輸配送管理に関与するすべての関係者のデータと、それらの関係者とのやり取りを一元化できます。これにより連携が強化され、プロセスが合理化されて、信頼できる唯一の情報源を得ることができます。

### 入荷物流の最適化

入荷貨物の可視性の制限を解消しようとしている企業のために、Blue Yonder の輸配送管理はすべての出荷の状況を包括的に把握できるようにして、事前の出荷予定通知 (ASN) を活用して計画と最適化を強化します。この可視化によってコストを削減できるだけでなく、混乱が最小限に抑えられ、先を見越して正確に在庫を管理できるようになります。

Blue Yonder の調査から得られた知見は輸配送管理における変革の重要性を示すものであり、Cognitive Solutions はそれを実現するための機能を提供します。AI を活用した連携型の俊敏なシステムへの移行は、業界の未来を切り開くものです。

Blue Yonder の輸配送管理は、こうした進化に後れを取らないだけでなく、進化の波に乗るものであり、複雑な相互接続された世界で成長していくために必要なツールを企業に提供します。

運輸業界は最先端のテクノロジーと Cognitive Solutions によって築かれる新たな時代の一步手前にいます。

Blue Yonder は知見に満ちた調査と革新的な TMS によって、サプライチェーン全体の効率の向上、コストの削減、サービスレベルの強化に向けた道筋を示します。企業がこうした変化に対処するには、ネットワーク化されたコグニティブなアプローチを導入し、競争優位性を維持して、卓越したオペレーションを実現することが必要不可欠です。

